

第265回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
ー「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（18）

第9章 「日本ルネッサンス史論」への道 （1942－1966）

1942年4月24日、福本は釈放される。14年間の獄中生活を雌伏の期間と見做せば、1983年に没するまでの41年間は後期思想が大きく羽ばたく期間であった。

『共同研究 転向』の共著者で日本社会主義の研究者であったしまね・きよし（嶋根清、1931－1987）は遺作『評伝・福本和夫』（思想の科学社、1988年）の中で次のように述べている。なお、本書における福本の歩みはしまねの死によって戦前で中断している。

……福本和夫の著作を読むときに、そこには、林業・漁業を含む農村・農民問題が論じられているばかりではなく、たとえば、日本ルネッサンス史論などにおいては、マニファクチュア論・技術論から浮世絵・書までが論じられていることを、わたしたちは知ることができる。このような守備範囲の広さが、福本和夫というひとりのマルクス主義者をトータルに捉えようとするとき、かなりの難しさをわたしたちに印象づける結果になっていると思われる。このことも、福本和夫の全理論・全生涯を研究対象として設定することを敬遠させるとともに、そうでなくとも、それを「福本イズム」のみに集約させた研究で代行してしまう原因の一つともなっているであろう。

（前掲22－23頁）

しまねの論じるとおりであろう。『福本和夫著作集』全10巻のうちで釈放後の著作は第3巻以降であり、分量にして全体の8割以上を占める。各巻のタイトルを並べると、初期文化史研究、農林業論、葛飾北斎論、中国思想の位相論、カラクリ技術史・捕鯨史、獄中思索・私の辞書論、日本ルネッサンス史論、自主性・人間性の回復をめざして、である。あまりに広汎な研究をどのように評価すればよいのか。「福本和夫の全理論・全生涯を研究対象として設定することを敬遠」するのは無理もない。

福本によるトータルな歴史認識は、かなり単純化した図式を用いると、「人間疎外からの自主性・人間性の回復」を基軸にした「江戸時代の「人間と自然の発見」（ルネッサンス）→明治維新（不徹

底なブルジョア革命、日本資本主義の進行、帝国主義国家へ）→絶対君主制下の２段階革命（ブルジョア革命→急転化のプロレタリア革命）」ではなかったか。

福本は「獄中思索」で、井上哲次郎（１８５６－１９４４、西洋哲学の紹介者）、岡倉天心（１８６３－１９１３、東京美術学校、日本美術院を創設）を日本ルネッサンス史論の先達であると論じる。福本は獄中で２冊の本に魅了された。井上『日本古学派之哲学』（１９０２年）と岡倉『日本の覚醒』（１９０４年）である。井上は国学、復古儒学、復古医学を、岡倉は復古儒学、陽明学、国学を取り上げて、日本ルネッサンスの「真の原因を内から来たもの」と道破したという（前掲『福本和夫著作集 第８巻』６４－６５頁）。

すでに福本は２段階革命の筋道（未来）、絶対君主制（現在）については論じていた。残るは明治以前の日本社会における「内発的発展論」（過去）である。

戦中派にとって１９４５年８月１５日の敗戦は「一身にして二生を経る」（福沢諭吉）ほどの大きな節目であった。福本にとっては１９４２年４月２４日がそれに相当する。釈放後の人生は日本ルネッサンス史論への大いなる助走期間であったといえる。

本章は『日本ルネッサンス史論』が完成する１９６６年までを扱う。日本共産党復党・除名といった政治活動、民俗学をはじめ葛飾北斎論、漂流船や農林業研究、等々が同時並行的に行われた時期である。多岐にわたる諸活動・諸研究は「自主性・人間性の回復」を目的とする日本ルネッサンス史論への一道程と見做すことができよう。

１ １７年ぶりの帰郷－福本逸子の回想

娘の逸子が戦後まもなく雑誌『民主評論 新年号』（民主評論社、１９４９年）に寄稿した「苦難の道」（前掲『福本和夫の思想』所収、４３８－４５１頁）に依拠して、釈放前後の逸子と家族、和夫の様子を描いてみたい。逸子は釈放後の和夫に４１年間寄り添って父の死を看取った。

逸子が数え年５つのときに和夫と別れたこと、母もんが和夫のために毎朝太陽に向かって拝んでいたこと（第２章参照）についてはすでに触れた。

「苦難の道」には家族の話が出てくる。福本の家族関係については「福本和夫聴取書（１９２８）」（前掲『現代史資料２０ 社会主義運動７』所収）に詳しい。１９２８年７月１１日の聴取で次のように供述している（３００頁）。

父の信蔵（当時６３歳）は中地主で長らく村会議員を務めた。非常に厳格な人であったが、学科選択などは子どもたちに任せていた。

父は母もん（63歳）とは再婚で、和夫には異母兄が1人いたが幼くして死亡した。広島輜重兵（兵站を担当）第5大隊で陸軍中尉を務めていた兄の武規は1922年に死亡。次が和夫。弟の義憲（33歳）は1926年に京都帝大経済学部を卒業して神戸市立商工実習学校（沿革不明）に教諭として勤務。妹キヨノ（30歳）は離婚後に東京の私立和洋裁縫女学院（1897年創立、現和洋女子大学）高等師範科に入り1928年春に卒業（どこで何をしているか和夫は把握していない）。弟の正人（26歳）は京都帝大理学部物理科で学び、1942年7月に卒業予定。弟の勇（22歳）は法政大学（1880年創立、1920年の大学令改正により旧制私立大学に昇格）高等科でドイツ法を学んでいた。夭折した異父兄を含めると兄2人、和夫、弟3人、妹1人の7人きょうだいであった。

逸子は小学1年生までは浜坂（兵庫県か）在住の父の妹のもとで暮らしていた。和夫の実家に帰ると「お父さんは赤だ、監獄だ」と周りの子どもたちに言われて泣いてしまったことがある。その頃はまだ比較的豊かで、祖父母の愛を一身に受けて不自由なく生活していた。前田寛治が描いた和夫の肖像画の前に「ハッピーチャンお上がり」とご飯やお菓子を持っていくのが日課だった。

和夫の検挙は家族の人生に大きな影響を及ぼす。叔父の義憲と正人は1週間拘留され、大学の試験中だった正人は卒業が1年遅れてしまう。東京の女専を卒業して松江の女学校に就職したばかりのキヨノは学校を辞めることになった。その後も叔父2人（義憲と正人か）が失職する。勇の結婚話はなかなか進まなかった。

父は未決在獄中に講談社刊行の月刊誌である『幼年倶楽部』（1926-1958）、『少女倶楽部』（1923-1962）を送ってくれた。田舎にこのような雑誌をとっている子どもはいなかったから逸子は友だちから羨ましがられた。父からの通信はおそらく叔父の指図で土蔵のタンスの中に全部保管されていた。逸子が読んだのは大阪の女子専門学校1年（18歳）のとき、祖母が亡くなる直前である。印刷されたような楷書の片仮名ばかりの細かな字が封緘葉書にぎっしりと書かれてあった。

女学校（倉吉高等女学校、現倉吉西高校）時代、卒業するまで周りから父のことをとやかく言われたことはなかった。朝、田井から下北条駅に徒歩で向かう途中、小さな子どもたちが「赤よ、赤よ」と言うてくるのにはホトホト閉口した。

和夫と連絡を取り始めたのは女学校4年生の終わり頃である。裁縫や料理が好きだったので女専（女子専門学校、戦後の女子大学、女子短期大学、公立大学の前身であることが多い）の技芸科に進もうと思って、東京の女専に願書を出す準備をしていた。担任は和夫に逸子が女専を受験することを伝えていた。和夫から担任宛てに手紙が来

る。娘には医師のような自由職業に就かせたい、女子医専に行かせるのが最上の選択だと思う（当時、女子医専は東京女子医科大学、東邦大学医学部、関西医科大学医学部の前身の3校しかなかった）。そのような趣旨が細々と書かれていた。逸子は父の愛情に感激して大粒の涙を流す。

逸子は医専を受けて合格すると、校長先生はじめ先生方は喜んでくれた。しかし、学費が心配だった。担任が祖父を説得しようと自宅に来る。祖父は反対した。

一番力と頼んでいた和夫が共産主義運動に入ったために、他の子供たちの失業が相つぎ、漸く就職しても、好条件のところには勤められない。従って家の財産も段々減少し、自分も年々老衰するのに、子供たちの世話にもなれず、和夫の将来はどうなるか今のところ見当がつかないから、ご好意はありがたいし出してやりたいが、到底自分には卒業させる見込が立たない。

（前掲『福本和夫の思想』443頁）

祖母が衰弱を見せていたので、往復にも近くて年限も短く学費の安い大阪の松蔭女子専門学校（1926年創立、現大阪樟蔭女子大学）技芸科に入学する。和夫には、医専進学をあきらめたこと、大阪の女専に通っていることを知らせなかった。逸子と和夫の手紙のやりとりは出獄まで続き、家の様子や健康状態などをその都度報告した。

75歳になるまで風邪もひかず病気で床につくことがなかった祖母が枯れ木のようにやせ細り病床に伏す身となった。逸子は父母の代わりに自分を育ててくれた祖母の看病のために女専を中退する。1941年6月23日の午前8時頃、祖母は息を引き取る。ヒトラーが独ソ不可侵条約（1939年8月23日に締結）を破棄してソビエト連邦を奇襲攻撃した翌日であった。

逸子は一人で祖父を助けながら和夫の釈放を待っていた。ふと思立って父の面会のため上京することにした。1942年1月15日の激しく雪が降る朝、下北条駅から初めて一人で東京へ向かう。上京後は叔父宅に泊めてもらい、豊多摩刑務所内にある予防拘禁所に父を訪ねた。受付すると所長室に通された。所長は父のことを聞き出したくていろいろと話しかけるが、逸子はうわの空であった。

間もなく、ペタペタと元気のよさそうな草履の音がして、入るなり、「やあー」と、ニコニコ所長に挨拶すると、「逸子よく来たねー」「大きくなったなー」と父は私をちっと見つめたまま

暫くはぼうぜんと向あっているのだった。余りにも感激が大き
く、胸が詰まってしまって、声すら出なかった。さて何から話
そうかと、言葉のいとぐちを探すのに、いらだたしさを感ずる
位に……。

(前掲447頁)

次の日、弟の邦雄、弟が世話になっていた医師、逸子の3人で
面会に行く。弟は父の友人のその医師が副院長を務める病院で働き
ながら夜間中学に通っていた。新宿伊勢丹で購入した耳垢取りや爪
切りなどの日用品、逸子が最も感動した『キュリー夫人』を差し入
れる。白髪頭の友人は髪が黒々している福本の姿に驚いていた。和
夫は上機嫌で北斎の紅富士の版画を見せてくれた。

3日目は、叔母が買ってくれた寿司の折詰をもって父を訪ねた。
看守は規則だから折詰をもって帰るように、と言う。和夫は逸子の
姿が見えなくなるまで見送ってくれた。下北条駅に降り立つと雪が
2尺(約60センチ)降り積もっていた。

和夫は4月24日の夜に突然釈放される。釈放されても常に東京
保護観察所、特高警察、憲兵の監視下にあった。その日は青山の知
人を訪ねるが歓迎されなかった。それから1ヶ月間は世田谷の叔父
宅で過ごし、17年ぶりに帰郷したのは5月末である。

元来、酒も飲まず煙草も喫わない和夫が出獄後に一番欲しがっ
たのはコーヒーと牛乳だった。帰郷の途中、京都駅で探したが見つ
けられなかった。まして戦時中の田舎では入手できない。もともと
少食の和夫は獄中生活で食が細くなっていた。しかし、帰郷後は相
当の健啖家に転じた。食事以上に好んだのが入浴である。1日に5
回も6回もカラスの行水が続けた。また、村を隈なくまわるところ
から始めて、少しずつ距離を延ばしていった最後には1里半(約6
キロ)を歩くようになった。ゆっくり休養して体力回復に努めた。

和夫は17年前と比べて60戸の村が大きく変わったことに驚
いている。第1に、赤瓦(石州瓦)葺きの家屋や蚕室がずいぶんと
増えたこと。富裕な家だけにあった瓦屋根が村中に広まり、藁屋根
はほんの数軒のみになった。第2に、耕作用の牛が増えたこと。以
前は牛をもたない農家の方が多かったが、ほとんどの家に牛がいて
数軒は2、3頭も飼っている。第3に、千刃稲扱がなくなって足踏
式脱穀機か動力脱穀機が普及していること。第4に、自転車、大八
車、リヤカーが激増していること。第5は、不毛の地であった砂丘
地が一面の桑畑に変貌したこと。第6に、すべての家から囲炉裏が
なくなり、戸別に据え付けの風呂場を造ったこと。

それは、我々の在獄中における小作争議の発展によって、小作
農民が救われた一方、養蚕がうまくあたって、農家のふところ

に、金がゆたかに入って、はじめて農家に余裕が生じたのによるであろう。
(『霧笛』300頁)

福本宅には村の若い人たちと小学校時代の同級生がよく訪ねて来た。来訪者は父を尊敬しているようであった。最も頻繁に足を運んできたのは村の駐在巡查と倉吉町警察署の特高主任である。特高主任の郷里が鳥取県と境を接する岡山県北(旧美作国)であり、和夫は作州の轆轤細工の木地師について熱心に聴いていた。村の若者と話をしながら方言や村の実情に倦むことなく耳を傾けノートを取った。

母校の倉吉中学校がある倉吉町は江戸時代から200数十年にわたる千刈稻扱の生産で知られていた。鉄道で30分ほどの距離にあり、和夫は幾度も通っては古老に稻扱の歴史を尋ね、作州出身の木地師の轆轤細工を見学した。中学校時代の友人の案内で中国山地の山あいの関金(現倉吉市)に調査に行ったこともある。また、獄中で発見した北斎の幾何学的構図技法を確かめるために、自宅から約30キロ西南の方向に望まれる中国地区の最高峰、伯耆大山の紅富士現象を観察、記録している。

帰郷して3ヶ月の間で調査研究したのが、伯耆北条地方の方言、千刈稻扱の技術史話、木地師からの聞き取り、伯耆大山の紅富士観察などであった(方言研究、民俗学研究は後述)。

土蔵に大量に保管されていた本の整理も終わり、和夫、逸子、邦雄の3人は上京する。先立つものは金であり、親類からなんとか1000円を借りることができた。上京しても和夫に職はなく収入もないだろうから当面の生活費にあてることにした。1942年8月31日の夜遅く、蕨駅(埼玉県)に到着。川口在住の和夫の友人宅に辿り着く。しばらくは仮寓して家を探すことにする。川口から稲毛(千葉県)、西千葉へ。保護観察下であり極貧生活を送る。夜間中学を終えた弟が上級学校へ進むときにひと悶着があった。一部教授たちの強硬な反対で入学が危ぶまれたが、入学試験の成績がよく、しかも和夫の同級生がいて職員会議で反対派を説得したおかげでようやく入学許可となったという。これはほんの一例であり、生活全般に圧迫を受けた。

1944年に入ると千葉の空襲が激しくなった。そこで房総半島の保田(現鋸南町)に疎開する。保田にはアインシュタインの相対性原理を日本に紹介した理論物理学者の石原純(1881-1947、東北帝大教授を歌人との恋愛事件で辞職、『アララギ』発刊に参加した歌人)が住んでいた。和夫はさほど親しくつきあいをしたわけではないが、石原はとても親切で人なつっこい学者で反戦主義者であっ

た。1945年8月15日、和夫は自由の身になる。9月2日、降伏調印式が艦上で行われていた米艦ミズーリ号を遠望したという。

1947年1月19日の夜遅く、友人の医師から石原博士が亡くなったとの知らせを受ける。翌日、お悔やみに伺い、午後には日本画家の野村雪江（1875-1961）を伴って石原の死顔を描かせてもらった。デスマスクは取られなかったので、石原の死顔を伝えるのは野村によるスケッチだけであるという（『霧笛』332頁にスケッチ所載）。

戦後すぐに和夫は藤沢（神奈川県）にある1915年創設の藤嶺学園から大学設置の際には学長になってほしいとの依頼を受けた（結局、大学は設置されなかった）。一度は断ったが、再度の依頼に恐縮して単身で藤沢に行くことになった。1947年4月、藤沢の元ゴルフ場（旧藤沢ゴルフ倶楽部、1931年オープン、1943年に藤沢海軍航空隊に接収）にある八州台グリーンハウスの2階に、和夫、夫と死別した妹、逸子の3人で住むことになった。近くには滝平二郎（切り絵作家、1921-2009）、丸木俊（夫の位里（1901-2000）との共同制作「原爆の図」で有名、1912-2000）が住んでおり交流があった。

やがて住民が増えたため、立退料をもらって1950年に藤沢市西富大門（現大鋸）に移る。ここが終の棲家となったのである。